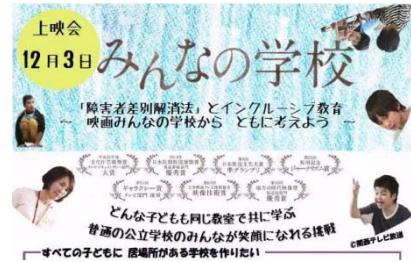


人間・地域・共生、そしてインクルーシブ教育

レポートでも案内してきたように、12月3日（土）午後1時から名古屋市立大学・さくら講堂にて表題をテーマに「つどい」を開催した。主催は「バクバクの会～人工呼吸器とともに生きる」中部支部。名古屋市立大学人文社会学部や「わっぱの会」などが共催し、愛知県と名古屋市の教育委員会などが後援した。



広い会場には、開会前から多くの参加者が詰めかけた。車いすで来られた方も多かった。当初、会場に不安を感じたが、下見を2回実施するなど準備してきた。会場は傾斜が緩やかで、障がい者にも好評のようだった。要約筆記、手話通訳の方たちに協力してもらうこともできた。参加者は若い人も多く227名にのぼり嬉しいかぎりだ。

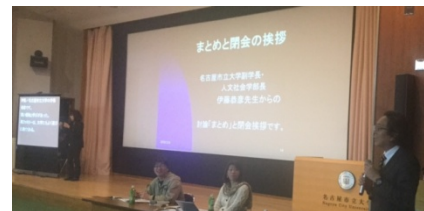


多くの参加者からアンケートが提出され、用紙にびっしりと書かれていたのが印象的だ。

「つどい」では、最初に話題の映画「みんなの学校」を上映した。映画上映中は音声ガイドも用意した。1時46分の映画であるが、何回も目頭があつくなる感動のドキュメンタリーだ。映画の舞台、大阪市立大空小学校の初代校長・木村泰子著『「みんなの学校」が教えてくれたこと』を1カ月ほど前に読んだが、やはり映画は心に迫るものがある。やはり「映像はエイゾー」だ。当初は映画上映会として企画されたが、第2部として表題のテーマでシンポジウムも実施することになった。第2部のコーディネーターの大役を久しぶりにつとめた。

シンポジウムでは、まず一木玲子さんに障害者差別解消法とインクルーシブ教育などについて話してもらった。そしてNPO法人ピアサポートみえの杉田宏さんが「今からここからこの場所で。みんなとつくるみんなの学校～ともに学び、ともに暮らす、ただふつうに、当たり前」と題して、ご自身の体験をあつく語った。

映画や話題提供を踏まえて、会場から質問や意見が相次いだ。どれだけ発言があるか不安であったが、障がい者やその家族、支援者、地域の方たちが、悲しみや取り組みなどを訴えた。最初は名古屋市立大学3年の学生さんであり、家族のことを交えた心に迫る発言であった。



最後に、名古屋市立大学の副学長・人文社会学部長伊藤恭彦先生が「閉会の挨拶」をした。5時きっかり

に終了し、「こーでねーか」と会場を見渡した。これを機会に、大学と地域、とりわけ障がいをもった人や家族、支援者らとの交流が深まることを期待したい。

(2016年12月5日)